Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

単語テストはどう作る

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1. 単語テストは必要か

たいていの定期試験には単語の知識を単独で問う問題が含まれている。いわゆる「単語テスト」である。これには，様々な理由が考えられる。1つは，英語の教師の多くが，単語の知識を，英語力を支える主要な要素の1つと考えていること。また，学習の観点からいえば，単語というのは，学習者にとって，ある意味わかりやすい学習対象であること。さらには，観点別評価の「言語や文化についての知識・理解」の評価規準として，単語の知識が設定されることも理由の1つだろう。

しかし，その一方で，単語の知識を単独で問うことにはどのような意味があるのか，もう一度立ち止まって考えてみることは意味のあることではないか。そもそも，現実の言語使用においては，単語の知識が単独で問われることはきわめて限定的であろう。また，多くの単語テストで問われるような知識を持っていたとしても，それらの単語を実際に使えるかとなると話は別である。

国内外の代表的な英語能力テストの中には，こうした単独の単語テストが依然として存在しているものもあれば，かつては含まれていたが，すでに姿を消してしまっているものもある。「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」といった4技能のテストがあれば，当然これらのテストの中にも単語が含まれているわけで，「単語テスト」が単独で存在しなくてもよい，という考え方は充分に成り立つ。

では，もし単独の単語テストが必要だとすればそれは何のためだろう。単語テストに何らかの意義があるとすれば，それはおそらくテストが持つ診断的な機能ではないだろうか。「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」がうまくいっていない場合に，単語テストを併用することで，さらに踏み込んで，問題は単語の知識の欠如なのか，文法の知識の欠如なのかなど，診断的に診ることができる。

2. 単語テストの問題点

語彙習得研究の文献を読めば，単語を知っていることとはどういったことかという議論が必ず展開されている。代表的なところを挙げれば，

① 意味を知っていること
② 使うことができること
③ コロケーションを知っていること
④ 語法を知っていること
⑤ ニュアンスがわかること
⑥ 語の構成要素の知識があること

等々といった具合だ。

しかしながら，定期試験においては，日本語の訳語を書かせたり，絵と結びつけたりするような問題が圧倒的に多い。これは，上の分類の①を問う問題である。他には，同義語・反意語を探すとか，仲間はずれの単語を探すといった問題もあるが，現状において，定期試験で測定されている単語の知識は，かなり限定的であると言える。

もちろん，限定的であっても，それが指導目標や評価規準と合致していれば問題ないだろう。しかし，指導目標や評価規準に対応した単語知識を測定するテスト方法のレパートリーがないために，目的に合った測定ができていないとなれば問題である。

こうした問題の他に，現状の単語テストには，文脈の欠如という問題もある。定期試験においては，空所補充問題を別にすれば，多くの場合文脈がない。つまり，単語を単独で問うているのである。しかし

ながら, 中学で指導する単語の多くは多義語であり, 文脈がなければ，語義が定まらない単語がかなりある。ある定期試験では,「then を日本語にしなさい」という問題が出ていたが，これだけから「そのとき」を唯一の正解とするのはいかがであろうか。確かに,「教科書で学んだ単語の語義で言えば」という隠れた大前提のもとに実施するのであれば，定期試験としては機能するかもしれない。しかし，テストとしての妥当性は問題視されるべきである。基本的には，冠詞・前置詞・接続詞などの機能語や take や make といった多義語などは，文脈の中で問うべきであろう。

3. どの単語を問うか

テストの内容妥当性を考えた場合に，どの単語をテストするかを考えなければならない。定期試験であれば，単語のサンプリングの主たる対象は教科書の単語となると思われるが，問題はどの単語を出すかである。一口に教科書の新出単語と言っても，様々なカテゴリーがある。*NEW CROWN* で言えば，WORDS 欄に太字で示されている「最重要語」(500 語) と, 並の太さで示されている「重要語」(700 語）と，日本語の語義の書いてある単語とがある。大枠としても，この中のどのカテゴリーの単語を出題するのかを決めなければならない。さらに，それを決めても，実際には，そこに含まれる単語のすべてを問うわけにはいかないので，何らかのサンプリングを行うことになる。だとすれば，そのサンプリングは，ランダムに行うのか，出現頻度の高いものとするのか，（何らかの）重要度に基づくのか。いずれにしても,「適当に」選ぶのではなく，何らかの方針に従って行うべきである。

4. 音声による単語テスト

発表語彙と受容語彙ということを考えるならば，どれが意味がわかればよい単語で，どれが正しく書けたり，言えたりする必要のある単語かなども決めておく必要がある。もちろん，このことは生徒とも共有しておく必要があるわけで，指導の中で，教科書の中のどの単語は書けなければいけないのか，また，どの単語は（当面は）意味がわかるだけでよいのかを知らせておく必要がある。*NEW CROWN* で言えば,「最重要語」は正しく書いたり，言えたりすることを求めるが,「重要語」は意味がわかればよく，それ以外の単語は単独の単語テストでは問わない，といった具合である。

単語のテストとなると，いきおい単語を書かせたり，書かれた単語の意味を表す選択肢を選ばせたりしている。ただ，これらは,「4 技能」という観点から見れば，前者は「書くこと」，後者は「読むこと」であることに気がつくだろう。しかし，少し考えればわかるように，単語の知識というのは，文字言語に関するものばかりではない。だとすれば，多くの単語テストは，この点，バランスを欠いていると言える。

こう考えれば，単語の知識を「聞くこと」や「話すこと」という音声に関わる技能として評価することも, それほど突拍子のない考えには思えないだろう。たとえば，曜日などには綴りと発音の関係が，かなり例外的なものもある。Wednesday などは典型的な例だ。このような単語の場合は，聞いて意味がわかったり，口頭で言うことができるけれども，正しい綴りを書くことはできない学習者も，初期の頃は少なくないかもしれない。授業では，日にちや曜日を言うことができるのに，テストではこれらの単語を「書かなければならない」となると，授業で行っていることとテストされていることがずれている可能性がある。

もちろん，これは，評価規準の「言語や文化についての知識・理解」に,「単語の知識」がどう記述されているかによるだろう。Wednesday であれば，これが正しく綴れないだけなのか，言うということもできないのかなどは，分けて評価したほうが，その後の指導や学習にも活かせる。もし言えればいいのであれば，カレンダーを見せて，それぞれの曜日をランダムに指し，言わせればいいだろうし，聞くことができればいいのであれば，ある週の日にちと曜日を見せておいて，曜日を音声で聞かせ，その曜日の日にちを書かせるということでもいいだろう。要するに，単語テストでも，見るべき能力とテスト方法を合致させることが重要である。